

國民學校理數科の實際 (その三)

東京女子高等師範學校附屬國民學校主事

堀

七

藏

既に述べましたやうに、理數科ではその目的を達成するに適切な教材を精選せられてあります。而して理數科の授業時數は國民學校令施行規則第一號表の課程に於て、次

の如く規定せられて居りますやうに、初等科第一、二學年では毎週五時であり、第三學年では算數が五時、理科が一時であり、第四學年以上は算數が五時、理科が二時であります。

體煉科	理數科		國民科			教科科目	
	算數	理科	地理	國史	國語	修身	第一學年
	五				一〇 國民道德 讀方、綴方、 話方、書方		時數 內容
	自然の觀察	算數一般					時數 內容
	五						時數 內容
	同	同			同	同	時數 內容
	一	五			八 讀方、綴方、 話方	二	時數 內容
	同	同				同	時數 內容
	二	二	一		八	二	時數 內容
	理科一般	同	郷土の觀察		同	同	時數 內容
六	二	二	二	二	七	二	時數 內容
基礎動作	同	同	地理の概要	國史の概要	同	同	時數 內容
六	二	二	二	二	七	二	時數 內容
	同	同	同	同	同	同	時數 內容

每週授業總計數	藝能科					體操
	裁縫(女)	工作	圖畫	習字	音樂	
二三三			三			五 遊戲、體操、衛生
二二五		工作	形象の看取 表現鑑賞	カナ、楷書		六 歌唱、鑑賞 基礎練習
二二七		同	同	同	同	同
三二一	二 裁縫初步	同	同	同	同	六 體操、教練、遊 戲、競技、衛生
三三三	二	同	同	同	同	同
三三三	二	同	同	同	同	同
三三三	二	同	同	同	同	同

備考 一時ノ授業時間ハ之ヲ四十分トス

右の第一號表で見られるやうに、國民科は第一、二學年には十時間、十一時間となつて居ります。そして理數科でも五時間、五時間となつて算數、理科に分けてはありませぬ。初等科第一、二學年では、國民科も理數科も未分化的の教材が多いからで、修身も國語も科目を分つことの出来ない教材があり、理數科でも算數と理科と科目を分つことが出来ないものが多いからであります。それで理數科の毎週五時間は、明白に算數が三時間で理科が二時間だとか、算數が四時間で理科が一時間だとかいふのではありません。勿論實際には算數が主となる時間もあり、また理科が主となる時間もありますが、算數でもあり理科でもありする時間もあるのであります。殊に第一學年の第一學期な

こには理數科の時間であつて、算數でもあり理科でもあるといふ時間が多いのであります。

初等科第一、二學年に於ては、全國共通の兒童生活に材料を求め、それを各教科に於て教材となし、更に科目の教材となす方針のもとに教材が選擇排列せられて居るのであります。

次に初等科第一學年に於ける教材連絡一覽表を掲げて見ませう。十分注意して御覽下さい。各科目の教材が如何に連絡してゐるか、御理會になることと思ひます。この表は初等科第一學年の教科書に精選せる教材の連絡一覽表であります。各月にそれを中心とする季節材料をとり、それから修身、國語、算數、理科、音樂、習字、圖畫、工作の教材を選択してあるのであります。單に修身は修身とし

て、國語は國語としてまた算數は算數としての教材體系が出来てゐるだけではありません。天長節を中心としてヨイコドモにはテンチャウセツといふ教材があり、ヨミカタで

はヒノマルノハタバソザイといふ教材、音樂ではヒノマル、圖畫・工作ではヒノマルノハタ、ハタチカカゲルといふ教材が選擇排列せられてゐるが如きであります。

月	五	四	月
	(四) (オトモダチ)	(三) (センセイ)	(二) (テンチャウ)
	(一) (ガクカウ)		
修身	ヨイコドモ(上)	ヨミカタ(一)	ヨミカタ(一)
國語	カズノホン(二)	自然の觀察	ウタノホン(上)
算數	自然の觀察	ウタノホン(上)	テホン(上)
理科	ウタノホン(上)	テホン(上)	エノホン(一)
音樂	テホン(上)	エノホン(一)	
習字			
圖畫・工作			
發音話方訓練	ハシレハシレ ココマデオイデ カミフウセン ウシガナク ヒバリ ユフヤケコヤケ オツキサマアル オハヤウゴザイ マヌ ホンダイサムサ ラツパノエヲカ キマシタ サヤウナラ タヤイマ	アカイアサヒ ハトコイコイ コマイヌサン ヒノマルノハタ ヘイタイサン チテチテ ガアガア アヒル	アカイアサヒ ハトコイコイ コマイヌサン ヒノマルノハタ ヘイタイサン チテチテ ガアガア アヒル
順序數	兵隊ゴツコ 運動會 十迄ノ數字 指、數字 石ケリ遊ビ	十迄ノ數ノ數 方。物ノ配列 春ノ野 紙トクレヨン オハヅキ遊ビ	一、學校の庭 二、記念の木 三、庭の花 四、庭の動物 五、春の野
一、ガクカウ	六、春の種まき 七、木の葉遊び	二、ヒノマル	イロ カミテツボウ タイサウ
三、ユフヤケ コヤケ	八、草花どり 九、草花植ゑ	三、エンソク	ハタヲアゲル
カブト コヒノボリ キレイナハナ ハナヲナラベル グンカン スキヘイサン			

九		七		六	
(九) ツヨイコ	(八) キマリヨク	(七) ナツヤスミ		(五) ゲンキヨク	
オ月サマ	川アソビ メダカサン ウミ シタキリスズメ	オミヤノイシダ アサガホ オハカサウヂ ハナツミ ユフダチ ニシ アリ(韻文)	タナバタ(韻文) ハコニハ テンジンサマ オミヤノイシダ(韻文)	ヒカウキ(韻文) オツカヒ デンワアソビ ゴメンクダサイ シリトリ カクレンボ キヲツケ アメガヤミマシ タ イクニフネ ホタルコイ(韻文)	
果物(同数ニ)	十迄ノ數ノ構成 朝顔魚取り 紙箱團扇 紙風船 輪投げ(圖表) ノ指導	増減 飛行機、戦車 ツバメ 色板並べ	矩形、正方形ノ 觀察製作 七夕祭ノ製作 風車ノ製作	色々ノ形 松葉細工 圖表ノ初歩導入 豆 十ヲ超エル數ノ 數ヘ方 カキツバタ 鯉、水鳥 時刻(時) 時計ノ見方 十迄ノ日ノ生活 鬼、鬼ゴツコ 増減 歸リ ヒヨコ、學校 猿蟹合戦	一〇、池や小川 の動物 一、麥蟲と蟲 とり 二、雨上り
一六、お月さま	一四、朝顔 一五、ばつたと り		一三、しやぼん 玉遊び	一、動物 一、麥蟲と蟲 とり 二、雨上り	一〇、池や小川 の動物 一、麥蟲と蟲 とり 二、雨上り
九、オ月サマ	八、オウマ		七、ウミ	六、ホタルコイ	五、カクレンボ
	一 二				
オツキミノゴチ ソウ	ミツアソビ カハイイトリ	オニハノダウグ	オサカナ ブランコ オフネ センセイ	アメガフル	オモチヤ 三カク四カク ナラベ クダモノ ハシレジドウシ ヤ キノハノイロイ ロ

月 一 十	月 十	月
(十三) オテツダ ヒ	(十二) オトウサ アントオカ アサン	(十) ウインドウク ワイ
六、カマキリヂ イサン(韻文) 七、サルトカニ 八、オチバ 九、イモヤキ 十、コモリウタ (韻文)	一、山ノ上 (韻文) 二、アシタハウ ンドウクワイ 三、ウサギトカ メ 四、ラジオノコ トバ(韻文) 五、西ハタヤケ	ヨミカタ 二
百迄ノ數 數ヘ方、十二 マトメルコト 數字、數系列 銀杏ノ落葉 貨幣(錢)ノ導入 差ヲ求メルコ 積木(立方體 圖表) 飛行機	加減記號ノ導入 計算練習 雜題 鳥、ドンダリ 小鳥、オシバ	カズノホン(二) 十マデノ數範圍 ニ於ケル加減 (導入)ノ計算 卵、梨、オ手 玉、オハジキ、 イモホリ、カ ケッコ
二一、もみぢ 二二、笛	二〇、取入れ	一八、野菜と果 物 一九、秋の種ま き
十二、ハトボツ 十三、コモリウ タ	十一、タネマキ	十、モモタラウ
キ ミ	マ ル	ハ ト
フ ジ	ヒ ノ	モモタラウ
アキノケシキ ドウブツ ケイトウ イロガミイレ ハラナラベル クダモノカゴ	ウインドウク ウインドウク ウインドウク トリキ	エノホン 二

月 二	月 一	月 二 十
(十九) テトハ自分 自分ノコ	(十七) オキヤク サマ	(十四) キヤウダ イ
二十、日本のし るし(韻文) 二十一、花サカ ヂヂイ 二十二、ユメ 二十三、机どこ しかけ	十六、ヘイタイ ゴツコ 十七、ネズミノ ヨメイリ 十八、シヤシン 十九、カゲエ	十一、オイシヤ サマ 十二、デンシヤ ゴツコ(韻文) 十三、ケンチャ ン 十四、冬 十五、お正月 (韻文)
豆マキ(年齢、圖 表) 二位數ト基數ト ノ加減(導入ト 計算) ノツツニ、部 落 風アゲ、鬼ゴ 雜題 梅ノ花、蜜柑 貯金箱、降雪 煙突、乗合自 動車、千代紙	曆日(月、日) 七曜ノ導入 百マデノ數範圍 ニ於ケル簡單ナ 加減 (導入ト計算) 正月ノ雜題 餅、雜煮、カ ルタトリ、マ リツキ 色タン形ノカゲ (色板並べ)	長サ(廻)ノ導入 正方形、矩形 ヲ含ム、觀察 ノ棒、クレヨン 物サシ、ハカ キ、豆細工、 紙ノクサリ 御幣ノ製作 買物ゴツコ (金高)
二八、春を待つ 庭	二七、日なたど 日かげ	二三、鳥の羽 二四、落葉かき
十八、ヘイタイ ゴツコ 十九、ヒカウキ	十六、デンシヤ ゴツコ 十七、カラス	十四、オ人ギヤ ウ
マ モ レ	ク ニ ヲ	サ ン
ウ ロ ネ	カ ラ ダ	ト リ キ
オメン マメマキ ツクエ、コシカ ケ オニギヤウ	オウチノ人タチ キリヌキモヤウ	オ正月 イヌトイヌゴヤ ニウエイ

月	三				
	(二十) （セウコク） （ミン）				
	二十四、ウグヒ ス	雜祭 菱形、四折切 抜ヲ含ム	二九、方角		
	二十五、つくし （韻文）	私ノ村 地ノ初歩導 念ノ初歩導 ヲ含ム	三〇、草つみ	二十、ウグヒス	
	二十六、汽車			上下大 小日月	ヘイタイサン ヒカウキ ヒカウキ ヒカウキモヤウ アカイリンゴ

新入園児を迎へる準備に就て

本號には、編輯部からのお願ひで、新入園児を迎へる準備に就て、廣く各地の誌友からの寄稿が集録されてゐる。いづれも豊かな實際経験を基礎とされた貴い御意見である。一々傾聴すべきことに充ちてゐる。それに加へてといふのではないが、餘白を借りて、これも必要と思ふ準備の一つ二つを。

一、新しい心持で迎へること。これは何も四月にといふばかりでなく、常々のことであるが、殊に、全く新しい心持で入園して来る幼児達の爲には、絶対に大切なことである。勿論幼児を扱ひなれてゐるといふことはいふことであるが、それは心の働き方、手の動き方がなれてゐることで、心持そのものが、なれつゝになつてゐるのであつてはならない。如何に上手であり、巧妙であつても、一人々々の幼児に對する、眞に新鮮な心持がなくては、決して眞に新入園児の心持を迎へることは出来ない。その古びきつた厚い革のやうな、又すれつからした革のやうな心のはだは、最も新らしく、最もやはらかない新入園児の心のはだに、どんなにか、うす氣味悪くさへ感じられることであらう。

倉橋生

二、ひとり／＼を迎へること。新入園児といふ言葉が既に、あの多數を一括した言葉である。實は、そんなものではなく、迎へられるのはひとり／＼である。皆さんといふ言葉さへ生れて始めて聞く子が多いであらう。勿論、幼稚園といふものとしては、だん／＼と集團生活へ導いてゆくのであるけれども、四月早々、組を作つて入り來るのではない。ひとり／＼で來る心を先づ受取つて呉れないで、たばにして受取られては、それこそ面くらふであらう。なまけなくもなるであらう。うらめしくもなるであらう。腹立たしくもなるであらう。但しこゝでひとり／＼をといつてゐるのは、個性を重んじてといつた心理學的な注意に止まらない。それよりも、もう一層眞實に、太郎は太郎として、花子は花子としての、こつちの心持ちをしつかり持つて迎へることである。

幼稚園の目的は、幼児を迎へてばかりあるものではなく、況んや、その心に迎向したりしてゐるところではない。が、先方從新らしく來る日、先づ眞に迎へてやることを心がけやう。